

小学校英語教育に対する指導者の意識調査

Teachers' Attitudes toward English Education in Elementary Schools

(2006年3月31日受理)

松畑 熙一 Kiichi Matsuhata	中野 宏 Hiroshi Nakano	名合 智子 Tomoko Nagoh	橋内 幸子 Sachiko Hashiuchi
垣見 益子 Masuko Kakehi	佐生 武彦 Takehiko Saiki	佐藤 大介 Daisuke Satoh	

Key words : 小学校英語教育, 児童観察, 教員意識, イメージ

抄 録

小学校英語教育に携わる教員を対象にしたアンケート調査の結果、次のようなことが考察された。

- ① 指導法が確立していると思われる初期の導入項目においては、教員の側にゆとりがあり、児童を楽しませることが容易である。
- ② 「思考」が求められる、難度が高い内容項目や活動においては、教員側にも指導法が確立しておらず、児童を楽しませることが容易ではない。
- ③ 「思考」が求められる、難度が高い内容項目や活動においても、自分に直接関わる内容であったり、自らが発表・参加できる活動であったりする場合は、児童は楽しむことができている。
- ④ 小学校教員は、「自分の英語力強化」、「レッスンプラン立案」、「良い教材の発見」に最も難しさを感じている。
- ⑤ 逆に、歌やチャンツを用いて大きな声を出させることは、比較的容易であると感じている。
- ⑥ 英語教育に携わる小学校教員は、英語教育に対して、プラスのイメージを強く感じている。マイナスのイメージは強くないが、準備の大変さから「多忙さ」も比較的強く認識しているようである。

I. はじめに

小学校英語教育の導入は、国レベルでは、平成14年に「総合的な学習の時間」が実施され、学習指導要領に「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等」と明示されたことに端を発し、平成18年3月に小学校英語の必修化の提言がなされるに至った。

岡山県では、倉敷市が平成16年に英語教育推進特区としての認定を受け、岡山市は平成17年にパーシャル・イマージョン教育を導入し、小学校英語活動を推進してきている。

中国短期大学では、英語コミュニケーション学科（以下、「本学科」）に児童英語教育コースが新設されたのを

機に、平成17年度に小学校の教員を対象とした「中国学園小学校英語活動支援講座」（文部科学省小学校英語活動地域サポート事業）（以下「支援講座」）を実施した。支援講座の内容および受講生の評価については、『中国学園紀要 第5号』に掲載の「（1）講座実施報告」、および、「（2）受講生アンケート報告」で詳しく紹介されている。今後も本学科では、小学校教員に対する英語教育支援活動を継続する予定である。

しかしながら、支援の内容を検討するためには、レッスンプラン作りを含め、現場で小学校英語教育に携わっている教員が、小学校英語活動についてどのような意識を持っているのかを探る必要性がある。

そこで、支援講座の受講者を対象に、小学校英語教育

に関する様々な角度からのアンケート調査を併せて実施することにした。以下はその概要と調査結果を報告したものである。

II. アンケート調査の概要

1. 調査の目的

本調査の目的は、次の通りである。

- ① 小学校英語活動に携わる小学校教員が、授業中の観察を通して、児童がどのような英語活動を楽しんでいるかを把握する。
- ② 小学校英語活動に携わる小学校教員が、どのような指導項目に難しさを感じているかを明確にする。
- ③ 小学校英語活動に携わる小学校教員が、英語活動に対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにする。

2. 調査の概要

前掲の目的のために、次のようなアンケート調査を実施した。

- ① 調査期間：2006年2月18日～2006年2月末
- ② 調査方法：無記名アンケート
- ③ 調査対象：平成17年度中国学園小学校英語活動支援講座の受講者77名
- ④ 回答数：60名（回収率77.9%）

回答数のうち、無回答項目を含むすべてを今回の有効回答とした。

III. 回答者の属性・英語教育の状況

1. 教職歴と小学校英語教育歴

回答者の教職歴と小学校英語教育歴の関連は表3.1の通りである。その結果から、回答者は20年以上の教職歴を持つものが多いが、全体としてこれまでに概ね2年間から4年間、英語活動を実践してきていることが分かる。また、学年別担当経験者については、表3.2のようになった。その結果を見ると、今回の回答者に担当学年では大きな差異はなかった。

表3.1 教職歴と小学校英語教育歴の関連

	教 職 歴						計
	無回答	1-5年	6-10年	11-15年	16-20年	20年以上	
無回答	0	1	0	1	0	7	9
1年	1	1	0	4	0	2	8
2年	0	1	1	2	0	3	7
3年	0	1	2	0	1	8	12
4年	0	1	1	1	2	3	8
5年	0	0	0	1	2	4	7
6-9年	0	0	3	0	1	3	7
10年以上	0	0	0	0	2	0	2
計	1	5	7	9	8	30	60

表3.2 学年別担当経験者述べ人数

学年	1	2	3	4	5	6
人数	25	20	28	28	18	20

表3.3 小学校英語教育開始年

平成	5-13年	14年	15年	16年	17年	無回答
人数	16	9	13	6	8	8

2. 英語教育の状況

まず、回答者の小学校英語教育の開始年について尋ねた。その結果が、表3.3に示す通りである。これを見ると、岡山では平成14年度の総合的な学習の時間が導入される以前より教師によって意欲的に取り組まれていたことが分かる。このことは、教師自身が英語教育の重要性を示唆していると考えられる。

また、平成14年度～17年度の英語教育については、クラスあたりの児童数、指導教員形態、教科書、カリキュラム形態などは表3.4の通りであった。

表 3.4 平成14年度以降の小学校英語活動について

	平成 14 年	15 年	16 年	17 年	
クラスあたりの児童数	1-10 人	1	0	1	1
	11-20 人	2	3	8	5
	21-30 人	8	9	13	18
	31-40 人	9	14	15	21
	無回答	40	29	23	15
指導教員形態	単独	7	5	5	7
	複数	9	18	24	28
	両方	3	6	7	9
	無回答	41	31	24	16
教科書	有り	0	0	1	1
	無し	21	31	36	44
	無回答	39	29	23	15
カリキュラム形態	教科	0	0	0	3
	英語活動	22	32	38	42
	無回答	38	28	22	15

この結果より、平成14年～17年の英語教育は次のような状況であったと言える。

- ① クラスサイズは、21人～30人、31人～40人が多かった。
- ② 複数教員による指導が多かった。
- ③ 教科書は殆ど使用しなかった。
- ④ 英語教育に携わった回答者は平成14年以降、年々増加した。
- ⑤ 平成17年度に初めて数校で教科としての英語教育が始まったが、殆どのケースは英語活動としてであった。

3. 海外体験

回答者の海外旅行の回数、海外滞在日数は、表3.5の通りであった。無回答が多いながらも、半数以上は海外への渡航経験を持っていることが分かる。

表 3.5 海外体験について

	海外渡航回数						
	滞 回	1-3 回	4-6 回	7-9 回	10 回以 上	平	
海外滞在総日数	無回答	21	0	1	0	0	22
	1-10 日	0	10	0	0	0	10
	11-20 日	0	6	3	0	0	9
	21-30 日	0	3	4	0	0	7
	31-40 日	0	3	1	1	1	6
	40 日以上	0	1	1	1	3	6
	計	21	23	10	2	4	60

4. 英語関連検定の状況

実用英語検定、TOEICに関して尋ねたところ、それぞれ37名、50名と無回答が非常に多かった。回答に協力が得られた中では、実用英検の準1級合格（1名）、2級合格（12名）、TOEICの800点以上（1名）、700点以上（2名）が含まれていた。

IV. アンケート結果

1. 児童が楽しむ英語活動について

まず、小学校英語活動で扱われ得ると考えられる内容として31項目を設定し、指導したことがあるか否かについて尋ねた。同時に、それぞれの項目について、児童がどの程度楽しんでいると感じるか、「大変楽しんでいる」（6）から「全く楽しんでいる」（1）までの6段階で尋ね、各項目の回答者の平均値を求めた。その結果が表4.1である。

その結果、前者の調査については、「数、色」を教えた回答者が最も多く、「動物、あいさつ」が次いで多かった。これらを含む比較的上位の項目は、比較的平易で児童に理解されやすく、身近な内容を含んでいる。英語活動の導入として広く指導されているので、殆どの教員が指導した経験を持っているものと思われる。逆に、比較的下位の項目は、導入から更に進んだ過程で指導されることが多いため、指導経験者が少なくなっているものと推察できる。また、指導項目として、様々な単語の指導が可能であったり、定型文として文を導入することが可能であったりするため、応用が必要な指導項目が下位に来ていることがわかる。

表 4.1 指導経験と児童観察における楽しさについて

指導項目経験		児童観察における楽しさ		
人数	順位	項目	平均	順位
50	1	色	5.0	5
50	1	数	4.8	7
49	3	動物	5.2	3
48	4	あいさつ	4.7	11
43	5	体の部分	5.1	4
43	5	体の調子	4.5	12
40	7	天候	4.3	19
36	8	動作	5.3	1
36	8	曜日	4.1	22
35	10	自己紹介	4.8	9
32	11	絵本	5.3	2
30	12	年令	4.0	25
27	13	形	4.3	16
27	13	季節	4.0	23
25	15	家族	4.4	15
25	15	12か月	3.9	28
24	17	時間	3.9	29
22	18	買物の会話	5.0	6
22	18	趣味	4.8	8
22	18	世界の国	4.8	10
21	21	学校の科目	4.4	14
19	22	職業	4.3	17
18	23	学校案内	4.3	18
18	23	食事の会話	4.0	24
18	23	誕生日	3.9	27
16	26	イベント・行事	4.4	13
16	26	衣服	3.9	26
16	26	私の町案内	3.8	30
15	29	学習発表	4.3	20
13	30	電話の会話	4.2	21
13	30	日課	3.5	31

※ 指導項目経験数の順位による。
 ※ 各順位12位以内に網かけ(筆者の任意)。

続いて、教員自身が実践した指導項目において、観察を通して児童が楽しいかどうかについては、「動作」、「絵本」、「動物」といった体を動かすような体験型の活動が上位に来ているといえる。しかし、最も低い項目である「日課」でも3.5であり、全体として児童が英語活動を楽しんでいる様子が窺える。

この指導項目と児童観察における楽しさの順位を比較すると、次の3点が読み取れる。

① 「指導項目経験」の上位12位までの項目は、8位の「曜日」と12位の「年令」を除いて、「児童観察における楽しさ」の上位12位までに含まれる。

このことから推測されるのは、多くの教員が指導を経験している項目、すなわち英語活動の比較的初期に導入される項目を、児童は楽しんでいるのである。この背景として、これらの比較的初期の項目は、指導法がある程度確立しており、教員が余裕を持って指導に当たれることが考えられる。教科書を用いないので、指導法の確立が、児童を楽しませる上で、より重要性を持っているのであろう。

逆に、経験者の少ない項目は、まだ指導法が確立しているとは言えず、教員の側により準備や教材探しの大きな負担がかかっているのではないかと考えられる。また、これらの項目は内容的にも難度が増し、児童は「楽しむ」だけでなく「考える」ことが求められるのであろう。

② 「指導項目経験」で18位の「買物の会話」、「趣味」、「世界の国」は、「児童観察における楽しさ」では6位、8位、10位と上位3分の1に入っている。

「買い物」も「趣味」も、児童には身近な話題であると思われる。従って、このことから、かなり活動が進んだ後に指導されると思われる難度の高い項目でも、児童自身に関心のある項目であれば、児童は楽しめることが推測される。

③ 「電話の会話」「学習発表」は、指導を経験した教員は最少レベルであるが、楽しみの度合いは4.0以上で、教員の目には児童が楽しんでいるように見える。

「学習発表」は、準備や指導方法の面で、教員の指導技術が問われる項目であるため、経験している教員が少ないのであろうが、児童にとっては、発表する楽しさを味わえることから、高くなっているのであろう。また、「電話の会話」は声に依存するコミュニケーションスタイルなので、英語表現の難度が比較的高いと思われる。それでも比較的楽しんでいる様子なのは、「電話」自体が持つゲーム的な楽しさに由来するのであろう。これらのことから、児童は少し難度の高い英語活動でも、自ら発表し、参加できる項目を楽しむ、ということが推測できる。

また、「児童観察における楽しさ」の項目全体の平均値は4.4であり、全項目が6段階の中間値である3.5以上となっている。つまり、今回取り上げた英語活動についてはすべての項目において、教員の視点からは児童が楽しんでいるように感じていることを意味している。児童が英語活動を楽しんでいると教員自身が感じることは、英語に対する意欲や関心を高める上では重要であるが、より言語感覚などといった深い側面まで触れられないことが分かる。ただ楽しいだけの活動になっていないかを今後調査する必要はある。

2. 英語教育で難しさを感じる項目について

英語教育に携わる上で必要と思われることがら12項目を設定し、それぞれについて、「非常に難しい」(1)から「全く難しくない」(6)の6段階評価を求めた。そして、回答者の平均値と標準偏差、そして各項目間の相関係数をSPSS 12.0を用いて算出したところ、表4.2のような結果となった。

まずは平均値から考察した。すると、6段階の中間値である3.5以下のものが、12個中10個を締めており、全項目の平均値は2.9であった。このようなことから、回答者は3.5以上の2項目を含めても、全般的に12のことがらを「難しい」と感じていると思われる。特に、「英語力の強化」が最も難しいと感じている。これは時間的な制約が大きな原因であろう。次に来る「発音指導」については、調音法や調音点などの知識不足も関連しているであろうが、自分自身の発音に自信が持てないことにより困難さを感じているのではないだろうか。続いて、「良い教材の発見」や「レッスンプランの立案」など「指導計画」も難しく感じられており、困難さが5番目以下

の「英語での発問」、「フォニックス指導」、「アルファベット」、「クラスルーム・イングリッシュ」も教員の「英語力」が求められる。これらはすべて、より一層の「英語力の強化」の必要性和その難しさが強く感じられていることから分かる。

一方で、平均値は低かったものの、「大きな声を出させる」、「歌・チャンツの指導」、「体操指導」は、小学校教員にとっては他の教科や活動でも求められる項目であり、比較的容易な方であることがわかる。

次に、各項目間の相関係数から考察した。ほとんどの項目間に相関が見られた。「英語力の強化」は11項目との相関が見られるが、特に「発音指導」、「英語の発問」、「フォニックス指導」との相関が強く、前項で述べたことが相関からも確認された。

また、最も強い相関が見られたのは、「レッスンプラン」と「良い教材の発見」であった。いずれも難しさも多く感じているようであった。

上記のことから、小学校の英語教育に携わる教員には、次の分野を強化したいというニーズが非常に高く意識されているものと考えられる。

- ① 発音、フォニックス、発問英会話などの英語力強化
- ② レッスンプランや教材開発・開拓

3. 英語教育に対するイメージについて

現在担当している英語教育に対するイメージとして20の形容詞を設定し、それぞれについて該当するレベルを「全く該当しない」(1)から「非常に該当する」(6)までの6段階で選んでもらった。この調査については、因子分析を施すため、全てのイメージに対して記入されていた47名が調査の対象となっている。その結果、各イメージの平均値と標準偏差、及び、因子分析の結果が表4.3である。

ここでも、まず平均値から考察する。好意的なイメージを表す言葉の平均値が大変高く、上位を占めていることから、回答者が全般的に担当中の英語教育を前向きに携わっていることが理解できる。支援講座において受講生が皆、明るく楽しそうに活動に参加していた様子からも、そのことが窺えた。指導する側が楽しんでいることが、児童達を楽しく英語活動に参加させる要因になっていることは想像に難くない。

表 4.2 英語教育における難しさについて

	英語の発音を指導すること	英語の歌・チャンツを指導すること	歌に合わせた体操を指導すること	英語で発問すること	フォニックスを指導すること	クラスルーム・イングリッシュを指導すること	アルファベットの読み方を指導すること	アルファベットの書き方を指導すること	大きな声を出させること	良い教材を見つけること	レッスンプランをたてること	自分の英語力を強化すること	n	M	SD
英語の発音を指導すること	1.00												58	2.1	1.3
英語の歌・チャンツを指導すること	.38**	1.00											57	3.5	1.3
歌に合わせた体操を指導すること	.31*	.68**	1.00										52	3.8	1.4
英語で発問すること	.56**	.28*	.30	1.00									57	2.7	1.5
フォニックスを指導すること	.52**	.20	.30	.49**	1.00								49	2.8	1.4
クラスルーム・イングリッシュを指導すること	.53**	.30	.30	.63**	.36*	1.00							56	3.2	1.4
アルファベットの読み方を指導すること	.14	.20	.33*	.29	.28	.39**	1.00						47	3.2	1.5
アルファベットの書き方を指導すること	.01	.29*	.47**	.12	.19	.25	.71**	1.00					45	3.4	1.8
大きな声を出させること	.17	.20	.20	.16	.29*	.22	.35*	.30*	1.00				56	3.4	1.5
良い教材を見つけること	.23	.20	.20	.44**	.56**	.35**	.33*	.32*	.38**	1.00			56	2.3	1.2
レッスンプランをたてること	.38**	.20	.30	.53**	.61**	.45**	.35*	.23	.47**	.75**	1.00		56	2.7	1.3
自分の英語力を強化すること	.52**	.10	.29*	.50**	.68**	.40**	.37*	.37*	.30*	.44**	.50**	1.00	58	2.1	1.2

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。(網かけは筆者の任意)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)。

表 4.3 英語教育における難しさについて

	因子 1 満足感	因子 2 多忙感	因子 3 不快感	因子 4 期待感	因子 5 疲労感	因子 6 不安感	M	SD
時間が速く過ぎる	0.87	-0.07	0.01	-0.05	0.09	0.05	4.5	1.1
楽しい	0.76	0.12	0.16	-0.01	-0.09	0.22	4.9	1.0
好きだ	0.73	0.05	-0.09	-0.01	0.09	-0.26	5.1	0.9
おもしろい	0.71	0.08	-0.08	0.07	0.21	0.38	5.0	0.9
待ち遠しい	0.68	-0.28	0.19	0.12	-0.28	0.07	4.0	1.2
分かりやすい	0.45	-0.23	-0.46	0.01	-0.01	0.26	4.0	1.1
大変だ	0.00	0.76	0.13	0.13	0.15	0.04	3.5	1.5
厳しい	-0.03	0.77	-0.12	-0.08	-0.14	0.02	2.6	1.4
難しい	-0.27	0.55	0.01	0.09	-0.03	0.43	3.4	1.5
忙しい	0.19	0.42	-0.20	-0.02	0.10	0.03	4.3	1.3
つまらない	0.00	-0.19	0.94	0.13	0.22	0.14	1.7	0.8
居心地悪い	0.26	0.10	0.59	-0.25	-0.13	0.00	2.2	1.2
退屈だ	-0.22	-0.27	0.43	-0.02	0.01	-0.03	1.7	0.9
希望がもてる	-0.06	-0.04	-0.06	0.77	0.08	0.06	4.3	1.1
もっとやりたい	0.07	0.00	-0.09	0.76	0.04	0.00	4.9	1.0
やりがいがある	0.31	0.25	0.12	0.49	-0.27	-0.27	4.7	1.0
面倒だ	-0.10	-0.08	0.02	0.14	1.06	-0.03	2.4	1.3
疲れる	0.38	0.22	0.13	-0.22	0.67	-0.20	2.8	1.3
放棄したい	0.04	0.15	0.23	-0.18	-0.10	0.72	1.5	0.7
暖かい	0.35	-0.01	-0.10	0.12	-0.06	0.64	4.2	1.0

因子抽出法: 最尤法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a 7 回の反復で回転が収束。

しかし、注目すべきは、「忙しい」というイメージの順位が高いことである。また、「難しい」や「大変だ」も平均値が3.0を上回っている。これには、次の背景が考えられる。

- ① 全般的に、小学校教員の仕事が過密になり、英語教育も負担増になっている。
- ② 英語教育をするにあたり、準備や教員の英語力の強化のために多くの時間とエネルギーが費やされている。

後者は、前項で既述されたことと一致するものである。前向きに英語教育に取り組んでいる小学校教員の負担を軽減するためにも、指導スキルや教材、レッスンプラン立案の支援が求められていることが痛感される。

また、因子分析の結果から、現在の小学校教員が英語教育に対するイメージとして6種類の傾向が明らかとなった。まずは、満足感を持っている教員である。自身の英語活動を児童と楽しみながら実践しており、英語教育に対して前向きに取り組んでいる。2つ目が、多忙感を感じている教員である。これは前述内容と一致する。3つ目は、不快感である。そういった教員には、小学校における英語教育の意義や目的などを深く理解することが求められる。4つ目が、期待感である。英語教育に対する積極的な態度が強いことはわかるが、こちらでは、1つ目の満足感とは異なり、必要性は感じているものの、その実践に対する取り組みまでは見えてこない。5つ目は、疲労感である。実践面での疲労を感じているのは、前項の調査での困難さを解決していくことが今後の課題として挙げられる。最後の6つめは、不安感である。自身の心にまだ必要性はありながらも、不安を感じている場合である。この分析結果から得られた因子を図式化すると図4のようにできるのではないだろうか。小学校英語教育への理念に対するプラスとマイナスイメージがそれぞれあり、実践面においても同様である。また、両方を持ち合わせていて、不安を抱えている教員もいることがわかる。

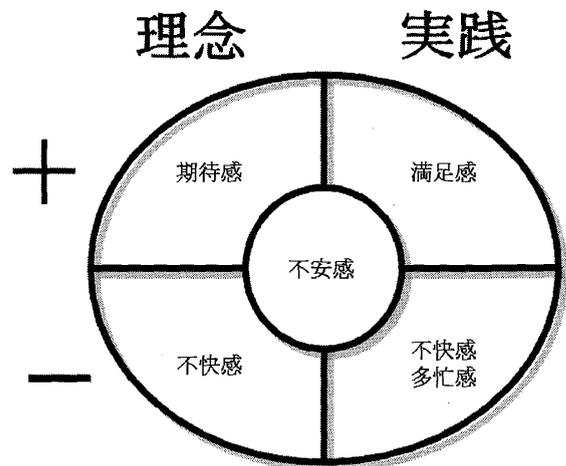


図4 因子関係図

V. おわりに

近年になり小学校英語教育が広く実践されていくようになった中で、現在の教員や児童の実態を把握することの重要性を今回の調査を通して改めて実感した。特に、活動本やDVD、CDなどが多く出版されてきており、小学校教員も多くの教材・教具が容易に手に入るようになってきた。しかしながら、児童の実態や適性・ニーズを把握しているであろうか。十分な指導方法で英語教育が行われているのかについて調査する必要もある。今後、さらに教員自身の研修の充実化と児童の実態把握の両者欠けることなく調査・研究がなされることが今後重要となってくるであろう。

参考文献

- 1) 松畑熙一, 中野宏, 名合智子, 橋内幸子, 垣見益子, 佐生武彦, 佐藤大介: 「中国学園小学校英語活動支援講座」(文部科学省小学校英語活動地域サポート事業)報告(1)講座実施報告『中国学園紀要』第5号(2006)
- 2) 松畑熙一他: 「中国学園小学校英語活動支援講座」(文部科学省小学校英語活動地域サポート事業)報告(2)受講生アンケート報告『中国学園紀要』第5号(2006)
- 3) 岡秀夫, 金森強編: 『小学校英語教育の進め方』, 成美堂(2007)
- 4) 大津由紀雄編: 「小学校での英語教育は必要か」, 慶

應義塾大学出版会 (2004)

- 5) 松川禮子：「明日の小学校英語教育を拓く」, アプリ
コット (2004)
- 6) 吉田研昨：「新しい英語教育へのチャレンジー
小学校から英語を教えるためにー」, くもん出版
(2003)
- 7) 特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会
編：「どうなる小学校英語」, アルク (2004)